

衣装の面からみた北設楽地方の祭り（第2報）

—— 七福神の衣装について ——

栃原 きみえ ・ 斉藤 一枝
壁谷 久代 ・ 鈴木 妃美子

A Study of Festivals of the Kitashitara District in View of Costume (II)

—— Costume of Shichifukujin ——

K. TOCHIHARA, K. SAITŌ, H. KABEYA and H. SUZUKI

はじめに

愛知県北設楽郡設楽町三都橋の津島神社で行われる参候祭りについては、第1報で報告したが、その祭りの中で扱われる七福神の軽妙なせりふと舞、及び衣装には興味深いものがある。北設楽郡には、花祭りなど多くの祭りが行われているが、七福神を扱った祭りは他にはなく、当郡唯一のものである。しかし、設楽町と同じ三河地域に含まれる愛知県蒲郡市の三谷町と愛知県宝飯郡御津町で七福神の踊りを扱った郷土色豊かな祭りが行われている。そこで三谷町の三谷祭り、御津町の御馬祭りと、三都橋の参候祭りを比較検討することは、参候祭りの由来や特色を知るうえに意義あることと考え、調査を進めたが、特に七福神の衣装について検討したので報告する。

方 法

調査期間及び方法は、昭和56年3月から11月の間に現地の民俗資料館を尋ね、また図書館等の資料により予備知識を得ておき、一方祭りの保存会や古老への聞き取り調査を行い、更に衣装や小道具などの採寸をした。なお祭りの当日は現地に行き、行事や衣装の写真を撮影した。

結果及び考察

三谷町の三谷祭り、御津町の御馬祭りについて、その由来及び祭事の概要、また祭りに扱われる七福神の衣装と参候祭りの衣装との比較検討をし、項目別に随時述べることにする。

1. 三谷祭りと御馬祭りの由来

参候祭りの行われる設楽町三都橋と三谷祭りの蒲郡市三谷町、御馬祭りの宝飯郡御津町は、いずれも東三河に属し、また豊川水系に含まれる地域に所在している。三都橋は愛知県の東北部に位置する山に囲まれた所であるのに対し、三谷町・御津町は南東部に位置し、三河湾に面している。この三地域を結ぶ主要な交通路は三州吉田（現豊橋）から新城を経て田峰に至る俗に中馬の道と言われる伊那街道、あるいは宿場町として知られる三河赤坂から作手平で作手街道に合流し、三都橋へ至る道であり、これらの街道を経て古くから交流があったのではないかとと思われる。従って、これら三地域のいずれが先に七福神を導入したかは明らかではないが、何らかの形でその信仰が伝わったとも考えられる。しかしこれらの三祭は同じ七福神を扱っているにもかかわらず、その芸風は三谷祭りと御馬祭りは近い形をとっているが、参候祭りはか

なり異なったものである。

(1) 三 谷 祭 り

三谷町は蒲都市東部に位置し、北に五井山、東に御堂山を眺め、南は三河湾に臨んでいる。町の中心を平坂街道が横切っており、この街道沿いに祭りの行われる八劔神社と若宮神社がある。八劔神社は寛治3年（1089年）武内左衛門佐三河五郎季頼の創建で、その祭神は日本武尊であり、また若宮神社は建暦2年（1212年）に創建され、その祭神は応神天皇である。

祭りの起源は元禄9年（1696年）当地の庄屋、佐左衛門によって創始されたと伝えられている。当時の三谷村では農業を中心に生計を立てており、漁業が大きく発展したのは、三谷町と改名された明治中期以降である。なお祭日は旧暦9月8日、9日であったが現在は10月の第4土曜、日曜の両日に行われている。

この祭りは、初日は西の八劔神社で試楽祭があり、翌日は当神社と東の若宮神社を結ぶ神幸祭が行われる。当日は八劔神社の鳥居の前に山車が勢揃いをする、そこへ若宮神社の神船である若宮丸が東区によって引き出され、八劔神社に到着する。このあと神前では松区の事触れの詞、山伏の辞、くぐり太鼓の神事が行われる。一方庭では松区・上区・西区・北区・中浜区の順に笹踊りや、神代の舞・大名行列・七福神踊り・連獅子などが次々に披露される。その後社前の4台の山車は、若衆達の威勢のよい山車起し（やまおこし）の歌と共に若宮神社へと向かう。この山車は金色に輝く見事なもので、巨額の費用を投じたものであると言うが、昭和35年まではその山車を惜し気もなく海中に引き入れ、勇壮な渡御風景が見られたと言う。しかし浜が埋め立てられ港になったために現在では行われていない。若宮神社では八劔神社と同様に神事が行われ、祭りは最高潮に達する。それが終ると再び山車は行列を組んで八劔神社へと向かう。その時、たとえ日没後であったとしても、一切の灯火を消して進行するという厳しい決まりがある。

なお北区によって披露される七福神踊りは、元禄から正徳の頃、豊年祈願の独特の形として始められたが、当時の七福神踊りは江戸文化の中心となった民間信仰の集合体であったという。また、隣の府相村には弁財天を祭る八百富神社があったため、弁財天はお堂の中に安置し、その使者である白狐役が面をかぶり白装束で踊る。これに誘われて、図1のように福祿寿・布袋・



図1 三谷祭り

寿老人・毘沙門天・夷・大黒神の神々が色とりどりの衣裳を付けて、笛や太鼓に合わせて踊る。その形は、軽妙かつ滑稽なことで定評があり、踊りの手は杖・鈴・綱の3種類である。

(2) 御 馬 祭 り

宝飯郡御津町は、東に豊橋市、西に蒲都市、北に豊川市と東三河の主要3市に囲まれており、南は三河湾に面している。また、御馬は御津町の南部に位置する字で、その中央を三谷と同じ平坂街道が通っている。なお昔から舟運の便に恵まれ、幕府へ蔵入れする御城米の積み出し港として栄えてきた。御馬祭りの行われる引馬神社は「人皇66代一条院正暦年中、京都八坂神社の分霊を」また八幡社は、「後鳥羽院建久2年源頼朝の臣比企藤九郎盛長此の地の地頭として着任の折、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の分霊を受け、守護神として祀る。」と古文書にあり、祭りは旧

暦の6月14日～15日の両日、真夏の午後から満月の夜にかけて行われたと言うが、現在では8月の第1土曜から日曜にかけて行われている。

祭事は、神輿の渡御に始まり、神鉦・笹踊り・七福神の渡御がある。神輿は25歳・42歳の厄年の男子が奉仕することになっており、昔は家人と別火により調理された食事をし、精進潔斎のうえ従事したと言う。

なお七福神踊りの形式は、三谷祭りと同様であり、図2のような踊りが披露される。この七福神踊りは、豊年・大漁を含めて村中に富と福とをもたらす神として親しまれている。また、3種類に分けられた踊りの中で、杖の踊りは悪魔を退散させて豊年を、鈴の踊りは稲刈りの豊年を、綱の踊りは大漁を願うという意味が込められている。



図2 御津祭り

2. 七福神の衣装について

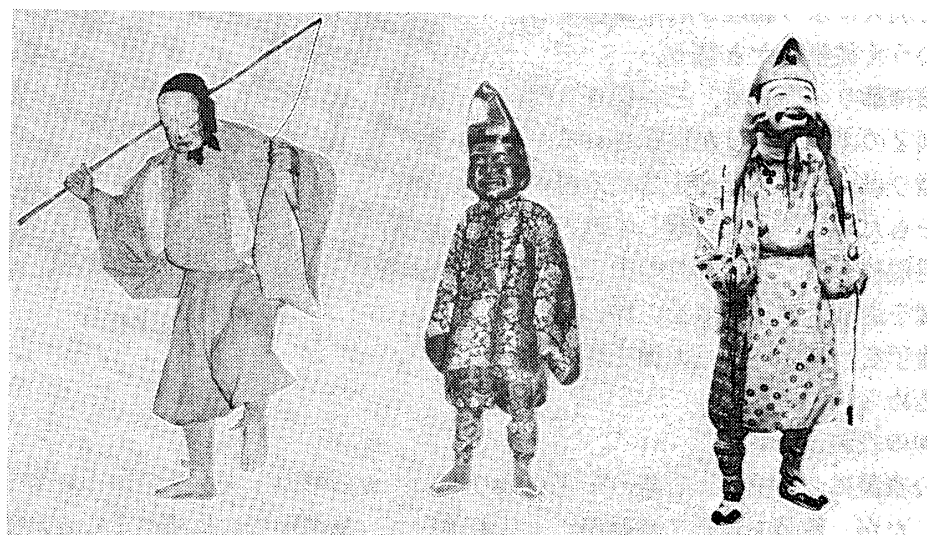
七福神の衣装について、三谷祭り・御馬祭り別に、その形態・文様・色についてその概略を表1に示したが、着装も含めて参候祭りと比較検討し、福神別に次に述べることにする。なお、参候祭りの衣装については第1報で報告したので参照されたい。

表1 三谷祭り・御馬祭りの衣装

役柄	三谷祭り			御馬祭り		
	形態	文様	色	形態	文様	色
夷	上狩衣	唐織宝相華	地色…千歳緑(5G $\frac{3}{4}$) 柄…金, 苔色, 金茶, 青色, 茜色	上半尻	菊唐草・桐葉	地色…藍白(5B $\frac{1}{2}$) 柄…赤色, 茄子紺
	下軽衫袴	七宝唐花	地色…黄土色(10YR $\frac{6}{4}$) 柄…金, 白, 藍色, 苔色, 濃色	下軽衫	小紋	地色…緋色(7.5R $\frac{4}{4}$) 柄…金, その他
毘沙門天	上陣羽織筒袖	四釜丸紋唐草(繡珍)	地色…グラスグリーン 柄…金, 袴…緋色 朽葉色(10YR $\frac{4}{4}$)	上陣羽織袴	龍(繡珍)	地色…朱色(7.5R $\frac{5}{4}$) 柄…金 駱駝色(7.5YR $\frac{7}{4}$)
	下軽衫	八釜華紋	地色…マルーン(10R $\frac{3}{4}$) 柄…金, 白, 飴色, 藍色, 松葉色, 海松藍色	下軽衫	(繡珍)	駱駝色(7.5R $\frac{7}{4}$)
大黒神	上狩衣	菊唐草	地色…海松藍色(10BG $\frac{3}{4}$) 柄…金, 深緋飴色, 鶯茶, 鳩羽紫	上狩衣	菊唐草	地色…褐色(7.5PB $\frac{3}{4}$) 柄…金, 白, 苔色, 紅殻色
	下軽衫袴	七宝	地色…焦茶(5YR $\frac{3}{4}$) 柄…金, 白, 飴, 千歳緑, 藍色	下軽衫	亀甲紋	地色…栗皮色(10R $\frac{4}{4}$) 柄…金
布袋	直綴	無	地黒	直綴	無	地マルーン(10YR $\frac{1}{2}$)
寿老人	上狩衣	桜七宝	地色…朱色(10R $\frac{5}{4}$) 柄…金	上羽織着	龍亀甲	地色…パフ(10YR $\frac{7}{4}$) 柄…金
	下軽衫袴	秋草	支子色(2.5Y $\frac{6}{4}$) 焦茶(10YR $\frac{3}{4}$)	下軽衫	花紋	地色…濃色(7.5RP $\frac{3}{4}$) 柄…駱駝色
福祿寿	直綴	無	地緋色(7.5R $\frac{4}{4}$)	直綴	無	地茄子紺(10P $\frac{3}{4}$)
きつね	上シャツ 下股引	無	地白	上シャツ 下股引	無	地白

(1) 夷

夷は天照大神の三男で，兵庫県西宮の祭神であり，また，海上・漁業・商業などの守護神である．夷の衣装は，参候祭り・三谷祭り・御馬祭りともに上衣は狩衣風，下衣は参候祭りと三谷祭りが軽衫袴，御馬祭りが軽衫である．また，図3のように色・柄・材質及び寸法・着装には差異があり，各祭りの特色を表わしている．



参候祭り

三谷祭り

御馬祭り

図3 夷

参候祭りと三谷祭りの上衣は同じ狩衣であるが，御馬祭りでは図4で見られるように前後の丈は同一ではなく，このような形式を半尻（はんじり）と言う．それは狩衣の一種で，公家の子弟の平常服として用いられたもので，歩行しやすいように後丈を短くしたものである．着装では，参候祭りの夷は，前身を軽衫袴の中に入れて，後身は外に垂らしている．また三谷祭りの夷は，前後とも上衣の裾を外に出し，羽織形式の着装であり，それにたすきを掛けている．一方御馬祭りの場合には，前後ともに上衣の裾を外に出し，胴部に腰紐を締め，前身の長い分をふくらませて着る．また，袖くくりがあるのは御馬祭りのみであり，他の二者には見られない．なお踊りの時には，その紐を引き締める．

次に上衣の色・柄は，参候祭りの場合，黄土色に納戸・膳脂の小紋型染めであり，三谷祭りでは，表1に示したような千歳緑に金・茜色・青色などの色鮮やかな唐織宝相華文様である．また御馬祭りでは，藍白に赤・茄子紺の菊唐草，桐葉文様が織られている．

なお，組み合わせる下衣は，部分的には違っており，それは参候祭りの場合には引きまわしの後接ぎ線位置で小さなタックがとられているが，他の二者の場合は，脇の縫目，股下の縫目

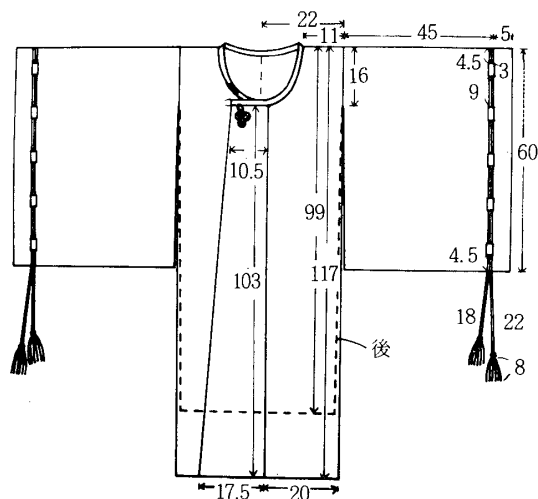


図4 夷の上衣（御馬祭り）

位置で深いタックがとられており、機能面での優劣はつけ難い。次に下衣の色・柄は、参候祭りでは金茶に臙脂の小紋型染め、また三谷祭りでは黄土色に金・藍などの七宝唐花文様であり、御馬祭りでは緋色に金などの小紋である。

なお面について述べると参候祭りの場合には、夷を威厳ある神として捕え、他の二者は正に福德、円満の福神として表わしている。

(2) 毘沙門天

毘沙門天は、印度伝来の神で平安時代から鎌倉時代までは、国の守護神、つまり武神として知られていた。後に福神の性格が与えられ、七福神に加えられたと伝えられている。

用いる衣装も他の福神とは異なり、図5のようにいかにも武人らしいでたちである。参候祭りの場合には、赤色木綿のシャツに股引きをはき、はばきを付け、鎧姿である。その胴部には白い大きな紐を二重に巻いて締めている。一方、三谷祭りでは、図6の筒袖胴着に、図7のような軽衫をはき、その上に鎧を付け、図8のような陣羽織をはおり、また手甲やはばきを付けている。なお御馬祭りの場合には、図9のような襦袢下着に軽衫を組み合わせている。その軽衫は裾口にはばきをとじ付けた変り型である。また腹当てを付け、陣羽織をはおっている。



参候祭り

三谷祭り

御馬祭り

図5 毘沙門天

色・柄は三谷祭りの場合の軽衫は金・藍・松葉色の八釜華紋であり、また筒袖胴着は朽葉色の唐草文様、鎧の上に着る陣羽織は、緑に金の四釜丸紋文様であり、緋色の衿が付けられた色鮮やかな衣装である。また、御馬祭りに用いる軽衫は、駱駝色であり、陣羽織は朱色に龍の文様である。

なお面は、三者いずれの場合もいかめしい武人らしい相である。また、三谷祭りと御馬祭りの場合には、面にかぶとが続けて付けられ、普通の面と異なっている。従って面をつけるのではなく、かぶる形式である。

(3) 大黒神

大黒神は印度の闘戦神、また食糧を掌る神として知られた大黒天神が、平安時代の初期に天台・真言の高僧達によって伝えられ、我が国の大国主神（おおくにぬしのみこと）と習合され、

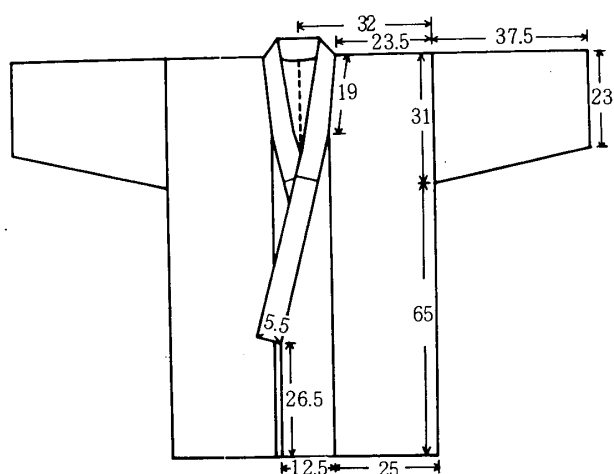


図6 毘沙門天の下着（三谷祭り）

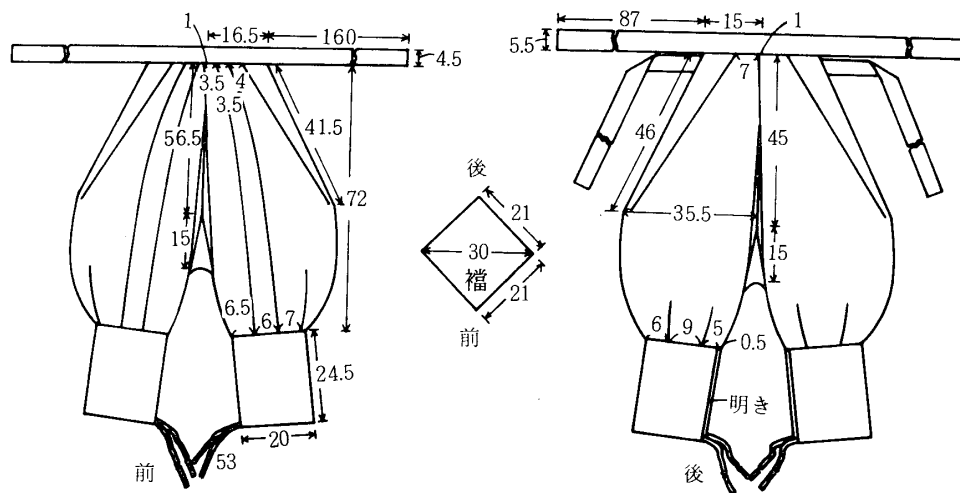


図7 毘沙門天の下衣（三谷祭り）

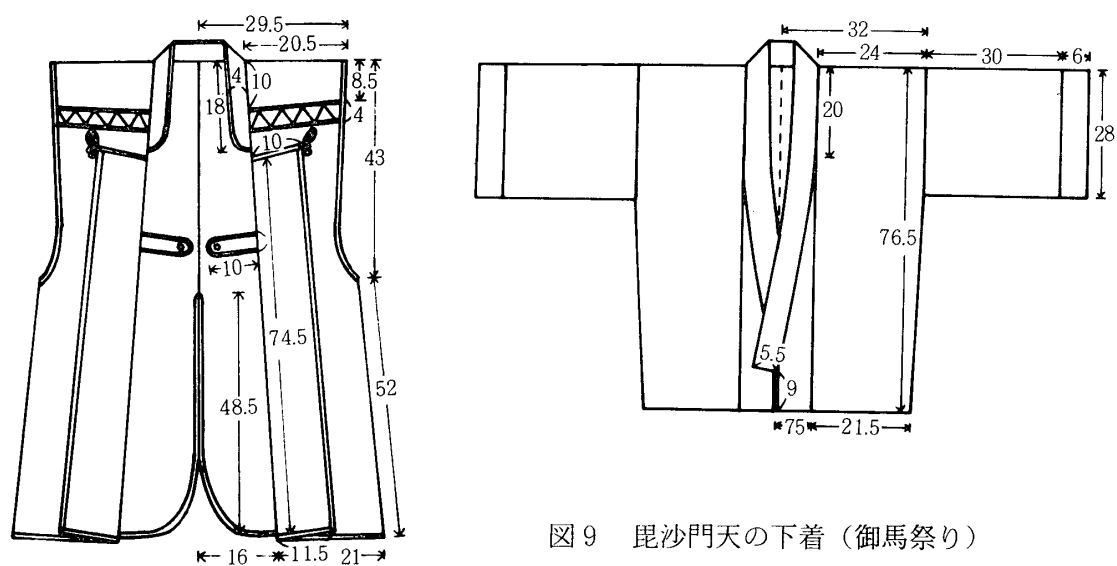


図9 毘沙門天の下着（御馬祭り）

図8 毘沙門天の陣羽織（三谷祭り）

後に七福神に加えられたと言われている。その大黒神の衣装は、図10のように三者三様であり、参候祭りでは、裁付袴の上に丹前風の上衣を着装し、その胴部に白い大きな紐を締め、たすき掛けである。なお上衣の色柄は、鶯茶に芥子・納戸・赤の山吹文様の草木染めである。また、三谷祭りと御馬祭りの場合には、図11のような丈の短い狩衣風の上衣に、下衣は三谷祭りが軽衫袴、御馬祭りが軽衫を組み合わせる。しかし、着装法は違っており、三谷祭りでは上衣を下衣の上にそのまま垂らして着るのに対して、御馬祭りでは、上衣の胴部位置を紐で締めて着装する。

なお、色・柄については次の通りである。三谷祭りの上衣は海松藍に金・鶯茶などの菊唐草文様で、下衣は焦茶に金・千歳緑などの七宝文様である。また御馬祭りでは、上衣は褐色に金・

白・紅殻色などの菊唐草文様である。

面については、参候祭りの場合、印度伝来の闘戦神としての勇壮な表情であり、他の二者は福神として柔和な相の面である。その面の上に各々、形の変った帽子をかぶっている。

(4) 布 袋

布袋は、中国の唐時代に実在したと言われる禅僧で、容貌は福々しく体軀（たいく）は肥大で腹部を露出し、常に袋をかついで喜捨を求め歩いたと言う。

衣装は三地域とも図12に示したような直綴（じきとつ）という黒の法衣を用いる。三谷祭りでは、その上に青磁色のたすきを掛け、御馬祭りでは白木綿の長着の上に直綴を重ね、袖に紐を通して肩にたくしあげて着る。直綴には胸部位置の切り替え線に7本の箱ひだがあるが、その形は、布袋の腹部肥大の体型に最適と思われる。なお、珍奇であるのは、三谷祭りの布袋の腹袋である。首に掛けた大きな白い袋に詰め物をして腹部に垂らし、布袋独特の体型的特徴を表わすように工夫されている。

面については各々特徴があるが、いずれも禅僧らしい威厳が感じられる。

(5) 寿 老 人

寿老人は、中国伝来の南極星の精で、長寿を受ける



参候祭り

三谷祭り

御馬祭り

図10 大黒神

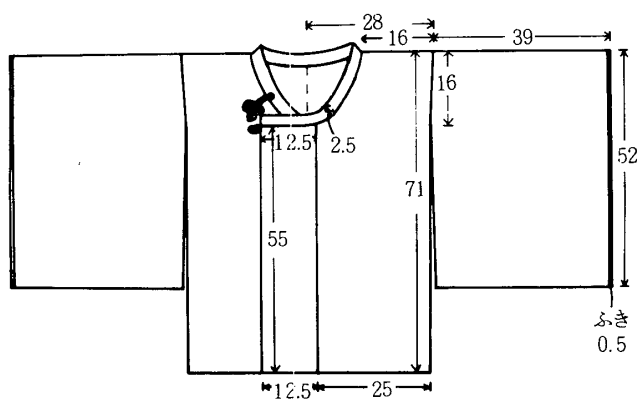


図11 大黒神の上衣（御馬祭り）



参候祭り

三谷祭り

御馬祭り

図12 布 袋

南極老人として尊ばれたと言う。

その衣装は図13のように、祭り別に各々特色がある。参候祭りでは木綿で作られた浄衣（じょうえ）であり、一方、三谷祭りでは丈の短い狩衣風の上衣に図14のような軽衫袴をはき、また御馬祭りでは軽衫を用い、更に図15の羽織着を組み合わせる。この上衣には、紐が被布式で付けられ、更に、袖付下部の脇は開放形で踊りの動作を妨げないように工夫された独特のものである。



参候祭り

三谷祭り

御馬祭り

図13 寿老人

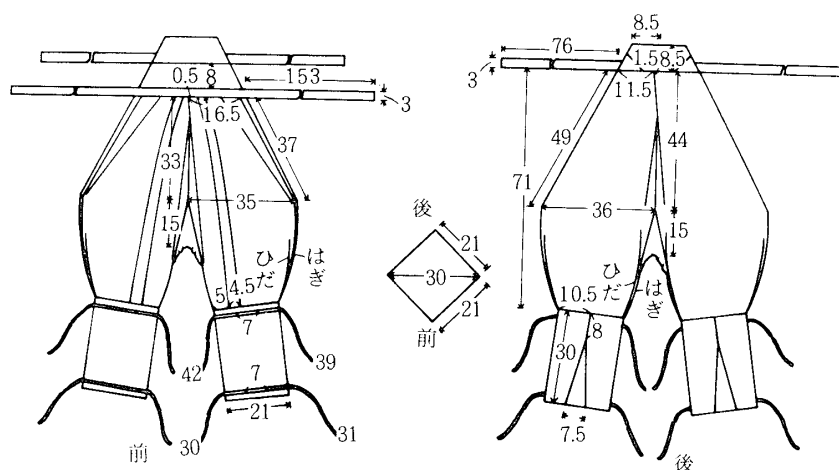


図14 寿老人の下衣（三谷祭り）

なお、三谷祭りの場合の色・柄は、朱色に金の桜七宝の文様で、下衣の軽衫袴は、支子色に焦茶の秋草文様であり、また御馬祭りの羽織着は、龍亀甲の文様である。参候祭りの寿老人は、衣装や持ち物の櫛などから推して、日本古来の素朴で厳肅な神としての

捉え方ではないかと思われる。それに対して、他の二者は好好爺的であり、白いあごひげを蓄え、明るく福々しい老神として表現されていておもしろい。

(6) 福 禄 寿

福禄寿は、中国伝来の福神で、天文説では人の幸福と寿命を掌る南極星の化身とされ、その思想は、早くから我が国に伝わり、室町時代には、福禄寿を祭り、尊ぶ信仰が流行したという。この神は長頭、短身で七福神の中では奇異な風ぼうである。

衣装は、図16に示したように、各々特色があり、参候祭りの場合には、夷の衣

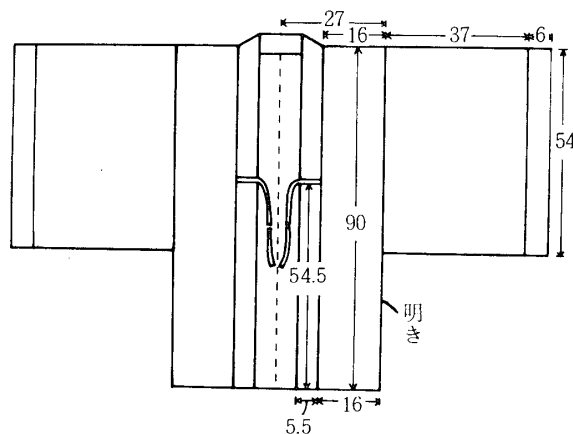


図15 寿老人の上衣（御馬祭り）

装と同一で、狩衣風の上衣に軽衫袴を組み合わせる。上衣は、黄土色に濃い納戸・臙脂色、また下衣は金茶に臙脂の文様である。一方三谷祭りの場合には、布袋と同じ直綴であるが、色は緋色である。また、御馬祭りの場合には、白の長着に茄子紺の直綴を用い、その胴部で白い紐を1回掛けて結んでいる。

面は、いずれも福祿寿の頭部大を象徴するもので、頭の長い大きな面を付けている。

(7) 弁 財 天

弁財天は参候祭りの場合には、祭りの中に登場

するので、その衣装については第1報で述べたが、三谷祭り・御馬祭りでは、その神霊をお堂の中に安置したまま、祭事が行われる。



参候祭り

三谷祭り

御馬祭り

図16 福祿寿

ま と め

北設楽郡設楽町三都橋にある。津島神社の参候祭りの中で扱われる七福神の軽妙なせりふと舞い及び衣装は、郷土色豊かで興味深いものがあるが、当郡には同一系統のものはなく、唯一の祭りである。しかし、三都橋と同じ東三河内にあり、また豊川水系に所在する蒲郡市三谷町、宝飯郡御津町では七福神を扱った祭りが行われている。そこで、それらの祭りを調査し、三地域の祭りの内容及び衣装について比較検討した。

1. 参候祭りの行われる設楽町三都橋は、北に笹頭山、南に竜頭山が迫る都塵を離れた静かな山あいであり、一方三谷祭りの行われる三谷町、御馬祭りの御津町字御馬は三河湾に面し、昔から漁港として栄えてきたところである。この三地域は伊那街道や作手街道を主な交通路として結ばれており、古くから生活文化の交流があったものと思われる。そこで相互に影響し合う歴史の中で、何らかの形で七福神の信仰が伝えられたとも考えられる。
2. 祭りの内容は、七福神の扱い方に違いがあり、二つの特色に分けられる。参候祭りの場合には、七福神の狂言や舞いが主であり、神座と福神との問答がある。また湯立の神事が行われるが、他の二つの祭りでは見られない。なお参候祭りの源流は田楽祭であったと言われ、その古い歴史を基盤とし、山深い地で伝承されてきたためか、素朴さと厳粛さを感じさせる祭りである。一方、三谷祭りと御馬祭りは別の面で特色がある。当地は海運の便に恵まれ、文化の流入が早く、経済的にも豊かであったと思われる。特に三谷町の各担当地区から引き出される絢爛たる山車は、参詣者の目を奪うばかりであり、その伝統を重んじる渡御風景は、勇壮の一語に尽きるものである。なお各地区の特色ある祭事が披露され、その中で七福神の杖の踊り・鈴の踊り・綱の踊りがある。それは躍動的で用いる衣装と共に華かであり、参候祭りを静とすれば、三谷祭りと御馬祭りは動と言うべきか。

3. 衣装は、三地域ともに七福神の性格がよく捉えられ、表現されている。

七福神の成立が、印度・中国及び日本古来の神や、中国から伝来の禅僧であるために、衣装は神仏混淆である。従って神職の用いる狩衣形式のものや浄衣、禅僧が用いる直綴などが扱われる。なお上下に分かれる形式では、舞いや踊りの動作を妨げないような、軽衫袴や股引が用いられている。衣装の材質は、参候祭りの場合にはほとんどが木綿であるが、草木染めの厚手木綿など、今では得難いものが含まれており、それは、質素な中に古い伝統が感じられる味わい深い衣装である。一方、三谷祭りの衣装はすべて絹織物であり、色彩豊かな文様と豪華な織は人々の目を楽しませるのに充分である。また御馬祭りでは化学繊維の物が多いが、これは、踊りの場合の摩擦による破損を防ぎ、保管上の利点を考えたものと思われる。

4. 面については、参候祭りと他の二地域の祭りでは大きく特色が分けられる。参候祭りの場合には、単なる神の面と言うよりも、それは威厳に満ちた複雑な表情である。面はすべて木彫りであり、中には約250年を越えるものがある。三谷祭りと御馬祭りの面は、張り子でできており、七福神の文字通り、福德・円満の相である。面の表情は各福神の役柄をよく捉え、その性格を表わしており、また衣装にも適合するように作られている。

以上、衣装と面について述べてきたが、参候祭り・三谷祭り・御馬祭りともに郷土に誇る貴重な祭りである。これらが我々日本人の心の故郷として、祭りの保存会の方々の信仰心に支えられ、形を崩さず伝承される上に、今回の研究が役立つ事ができれば筆者等の幸いとするところである。

最後に本研究にあたり、貴重な資料の提供と懇切な御助言をいただいた参候祭り保存会、三谷祭り七福神踊保存会、御馬祭り保存会の方々に深く感謝するとともに、三谷祭りで何かと便宜を与えて下さった竹内若太郎氏、御馬祭りでの石黒寿一氏、また七福神の衣装製作にあたられた清水桓氏に厚く御礼を申し上げます。なおこの研究は、本学生活科学研究所の機関研究である「北設楽地方の生活と文化」の一環として、当研究所の助成によって行ったものである。

参 考 文 献

- 1) 北設楽郡史編纂委員会：北設楽郡史，民俗資料編，320—329，北設楽郡史編纂委員会（1967）
- 2) 津島神社：無形文化財参候祭，設楽町三都橋津島神社（1973）
- 3) 蒲郡市教育委員会：蒲郡市誌，353—355（1974）
- 4) 竹内金六：今昔の三谷，18—33（1929）
- 5) 喜田貞吉：民族と歴史，3，25—27，66—149，180—255（1920）
- 6) 小野教孝：新国語図録，25—59，共文社（1970）
- 7) 和田三造：色名大辞典，日本色彩研究所編，創元社（1954）
- 8) 三隅治雄：日本祭祀研究集成，4，1—24，名著出版（1977）
- 9) 宮本常一・宮田登：早川孝太郎全集Ⅱ，242—255，未来社（1976）
- 10) 田中義広：東海の祭り，90—91，中日新聞本社（1980）
- 11) 磯貝勇・津田豊彦：日本の民族「愛知」，170—171，第一法規（1973）
- 12) 林英夫：山なみ遥か歴史の道，104—111，集英社（1981）
- 13) 今泉定介：鎧着用次第・冠帽図会・礼服着用図・装束着用図，154—156，吉川弘文館（1930）